SYDきらめきメッセージ
全国コンクール

コンクール・表彰式が２月23日に開催されました

１２名の「きらめき」を発表していただきました

おめでとうございます。今後の活躍に注目です

実 施 概 要

1．趣　　旨

小学生から青年までの勇気や感動を与えてくれるきらめき体験談を全国的に募り、選ばれた各部門の優秀者が自らのきらめき体験を青少年たちの前で発表する。このことにより、同世代への大きな励ましのメッセージとなり、“勇気”“元気”“やる気”を与え、社会の一員として自らや周りを輝かせ、生きる力を育むなど青少年の健全育成に寄与する。

2．募集と選考

ＳＹＤ事業参加者をはじめ、全国の小学校・中学校・高等学校、都道府県教育委員会、社会教育団体、青少年団体に広く募集した。応募者 3,631 名の中から選考委員・担当者職員により 15 名を選考し全国コンクールをおこなった。

3．全国コンクール審査の観点及び方法（ＳＹＤらしさ、メッセージコンクールである）

全国コンクールは令和元年２月２３日(日) ＳＹＤホール会場に実施した。

1）発表者の順序・配慮

・発表は低年齢の部門から低年齢順に原則として発表する。
・発表者が精神疾患など人前で発表できないような人でも、ビデオ等で対応するなどして参加できるよう配慮する。
・発表時間は、小学生３分程度、中学生以上は４分から５分まで。

2）審査の観点

登壇から降壇までの発表者の全身から伝わるメッセージを審査員の感性により１０点満点で採点する。（低年齢者に配慮し、たどたどしくても一生懸命さなどメッセージが伝わってくるものも評価）

(1)メッセージは、きらめき、ブレイクスルー、自分の中の奇跡などの体験談である
(2)メッセージは、ささやかな出来事であっても、ほのぼのとしたもの、心が温かくなるものである
(3)メッセージは、困難や挫折をのり越え、同世代への大きな励ましになるものである
(4)メッセージは、青少年に“勇気”“元気”“やる気”、そして感動を与えてくれるものである

3）審査委員会

審査委員により以下の賞を決定する
☆文部科学大臣賞１点 ☆理事長賞１点 ☆優秀賞３点 ☆きらめき賞等数点
・文部科学大臣賞は各部門最高得点者の中から審査し決定
・理事長賞は最もＳＹＤにふさわしいものを理事長が選考し決定
・優秀賞は部門に関係なく高得点者を優先して審査し決定
・きらめき賞は発表者全員を表彰

４．審査委員

委員長：御手洗　康（ＳＹＤ理事長）

明石　要一（千葉敬愛短期大学学長）
石田　博嗣（特別養護老人ホーム介護室長）
古賀　克彦（北九州市立小学校校長）
田中　浩史（跡見学園女子大学教授）
青木　富造（ＳＹＤ常務理事）
安仁屋　聡（放送会社執行役員）
両家　優子（航空会社客室乗務員）
宝井　琴鶴（女流講談師）
山﨑　一紀（ＳＹＤ主幹）

５．発表者（市町村、学年、氏名、テーマ）

☆小学生の部

❶茨城県日立市　小学校３年　福地　美咲　思いやりの気持ち
❷福井県福井市　小学校４年　福野　光莉　あさむつ子ども太こ
❸埼玉県新座市　小学校６年　荻巣はるか　悔しさがくれた喜び

☆中学生の部

❹東京都世田谷区　中学校３年　中谷　愛海　突然の非日常と優しさ
❺愛知県名古屋市　中学校３年　渡辺　美愛　限界を越える
❻兵庫県西宮市　中学校３年　稲葉　紫真　なりたい自分
❼香川県善通寺市　中学校３年　内田　啓介　自分を信じろ

☆高校生の部

❽福島県須賀川市　高校２年　瀬谷　愛梨　今、私にできること
❾群馬県高崎市　高校２年　長壁　楓華　はじめの一歩
❿沖縄県那覇市　高校３年　西江　樹　人は変われる

☆青年の部

⓫沖縄県名護市　大学２年　東江　椋佑　フィリピンの活動を通して・・・
⓬東京都杉並区　大学３年　三浦彩由香　一歩先へ

文部科学大臣賞

「自分を信じろ」

内田　啓介（香川県・中学３年）

僕は生まれた時、あまりにも小さかったので保育器に入りました。そして未熟児網膜症になり、右目の視力を失いました。僕は左目が頼りですが、左目も視野と視力が限られています。そんな僕を、２度の試練が襲いました。１度目は、小学校５年生の時。プールのなかでゴーグルが左目を突き、左目も見えなくなりました。でも１か月ほどして出血が引きゆっくりと回復しました。

２度目は、中学２年生の時。部活が終わり自転車に乗って家に帰ろうとしたとき、周りの物や色が、突然ぼうっと見えました。帰って母に言うと、「心配だったら明日病院へ行こう」と言われました。朝目を覚ますと、小５の時と同じような状態になっていました。でも前のように出血は引かず、左目はずっと薄ぼんやりしたままでした。病院の先生は家族に「手術をしないとこの状態がずっと続きますよ」と言いました。家族は長い間悩み続けました。僕の目は手術が大変難しく、危険を伴っていて、手術によって逆に完全に見えなくなってしまうことがあったからです。

それでも僕は、手術を受けたいと思いました。階段から落ちた時、僕は父と母に思い切って言いました。「見えないつらさはぼくにしかわからない。少しでも望みがあるなら、手術を受けさせてほしい。」手術の日が決まりました。入院する日になると胸がドキドキしました。無事に見えるようになるのか。もし完全に見えなくなったらどうしよう。そう考えると、眠るのもままならなくなりました。

病院の夜、色んなことを思い浮かべました。幼いころから父や母が、僕のしたいことに何でも挑戦させてくれたこと。ピアノを習わせてくれたこと。たくさんのボランティア活動にどんどん参加させてくれたこと。そのおかげで、僕は学校や老人ホームでピアノ伴奏をして喜んでもらっていること。書道家の先生から僕の書く字がいいと言われ、作品がプロの個展で展示されたこと。ガーデナーの先生に色彩感覚が素晴らしいとほめられ、病院の屋上庭園の植栽デザインを任され、ミニバラの庭を作ったこと。

両親は僕を「障害者」としてではなく、つねに「挑戦者（チャレンジャー）」として育ててくれていたのだと気が付きました。だからこそ僕は、目が見えなくなっても慌てず、音声ソフトでテスト勉強を続け、ピアノの練習も続けられていました。両親はずっとメッセージを送ってくれていたのです。「啓介、自分を信じろ。障害があっても、自分を信じろ」と。僕は挑戦者。挑戦するたび、成長していく。何だか身体中が温かくなってきました。そして不安に負けずがんばろうという、強い意志が湧いて来ました。僕は、見えるようになる。絶対、見えるようになる。啓介、自分を信じろ。

手術は成功し、僕の左目の世界が戻って来ました。その世界で今僕に見えているのは、将来の夢です。僕は将来、音楽セラピーのできる介護士になりたいと思っています。

最後に、父と母にあやまりたいことがあります。以前、「なんで僕だけ、みんなとちがうん。」と聞いて、両親を責めてしまったことがありました。「けいすけだけ、ごめんね。」と言いながら、父も母も泣いていました。あの時は本当にごめんなさい。そんなことはだれのせいでもないことです。僕はどんなに小さくても生き抜いてきました。小さい時から挑戦者でした。そのことに、誇りを感じています。これからも自分をしっかり信じて、挑戦を続けます。小さな幸せを目指して

理事長賞

「人は変われる」

西江　樹（沖縄県・高校３年）

♪俺は、俺は、沖縄生まれ、沖縄育ち、半分バカで半分アホ、釣りバカおやじの三男坊♪

全国手話大会で優勝しました、その時のセリフです。

私にとって手話は、小さい時から身近な存在でした。叔母や従妹、そして母親が聴覚障害者だったからです。しかし私にとっては手話はマイナスのイメージしかありません。実は小学生の時、母親のことで周りの友だちにからかわれていたのです。母をかばうことができず、いっしょに笑うことができない自分がいました。今になってはつらい体験です。中学校に入学してからは、友人や教師とのトラブルで人間不信になって登校拒否になり学校へ行けなくなりました。当時は自殺まで考えていたので高校進学など全く考えてもいませんでした。

また父は僕が３歳の時に他界し、母は聾で言葉がうまく通じず、僕と毎日喧嘩が絶えませんでした。そのため中学の時から父方の祖父母の家で暮らすことになりました。あ

る時、父が書いた文集を見つけました。見出しは「息子は、我が家のアイドルです。」私の名前について、樹木の「樹」と書いて「たつき」と読むんだよ。堂々とした大木となって、大木の木陰に人がいっぱい集まり休憩できるような信頼される人になってほしいと、名付けたことが書かれていました。心臓の病を生まれながらに持っていた父はいつ死ぬか不安を抱えながら、「樹が結婚して子供を産み育てるのを見たい」と書いてある内容を見たときに、「下を向いてはいけないなー」と、目が覚める思いでした。それまでは、それまでは、祖母に何百回も「具合が悪いので休みます」と学校に電話をしてもらっていました。あの頃は、自分の弱さに向き合えず逃げてばかりで、父からの自分へのメッセージは嬉しさと驚きでいっぱいで、「もっと１人で歩けるように踏ん張らないといけない」と気づきました。

そんな時、教育相談をしてくれた男の先生と洋服の趣味が合い、話ができるようになり、少しずつ前へ進む勇気が出てきました。中学へはトータル３か月しか通ってなくて、勉強も良くない私でしたが、先生から「お前なら高校に行けるよ」の一言に、勇気を出し、受験し合格しました。

高校に入学したものの、人見知りが激しく、人間が怖くて、人とあまり関わりたくないと思っていた矢先に出会ったのが、手話の授業でした。手話の授業は、先生がとてつもなく明るくて、私が他を向いてたら無理やり首ねっこつかまえて前を向かされるような先生でした。「どこみているかっ！（ゴツン）」と愛のムチ（笑）。陽気で前向きで元気があり、圧倒されながらも楽しい授業に私はどんどん引き込まれていきました。２か月ほど経った頃に、その先生から手話部への誘いがあり、その先生が指導する手話部だったら楽しくやっていけるのかなと思い入部しました。手話部に入ったら思っていた部活動とは違っていました。手話で歌ばかり歌っていました。歌が大好きな私は歌詞の意味を深く考えながら、表現の楽しさを学ぶことができ、自分の知らない世界にどんどん引き込まれて楽しくなっていきました。そればかりではなく、部活動を通し、色々な人との出会いがあり、仲間ができたことが一番うれしかったです。多くの仲間に出会えて、私自身の考え方も変わり始めました。

手話部で関わる仲間と切磋琢磨するにつれ前向きになり、どんどん笑顔が増えていきました。１年目は一人っ子の自分に兄弟ができたような気分になり、色々な相談のできる仲間が増え、２年目はチームの絆ができ手話の面白さも知り、全国大会で優勝することができました。３年目には部長になったのですが、喜びだけではありません。仲間とのぶつかり合い、部活をやめていく人もいる中で、本当に自分はこれでいいのかなと思い、泣いた夜もありました。手話の先生は私が悩んでいるときは、いつもすぐに駆けつけてくれて、私の話を聞いてくれました。自分を責め、落ち込む日々もありました。３年目に手話の大会全国初の２連覇という結果を出すことができました。

手話は大切なコミュニケーションのツールですが、僕にとって手話は人と人とをつなげる魔法のような言葉だと思っています。人と人が繋がれば、仲間ができる。仲間ができると人は変われるのです。変わる勇気がない人がいたら、そばに行って、手話を教えてあげたいです。手話に対するマイナスイメージから今では、堂々と人の目を気にせず、聾者の母をはじめ聾の叔母・聾の従妹に手話を使ってたくさん話しています。

卒業後は専門学校に内定しています。これからも手話という言語を通していろんな人と関わっていきたいです。

優　秀　賞

「あさむつ子ども太こ」

福野　光莉（福井県・小学４年）

ドンドンドドン。ドンドンドドン

私は小学校２年生から「あさむつ子ども太こ」で活動をしています。あさむつ子ども太こは、私の住んでいる地域に何十年も前から続いている太こチームです。「光莉ちゃんもたいこやってくれんかなあ。子どもが少なくてこまってるんや。」と、近所に住んでいる私のおじさんが、とれたての野菜を家に持ってきてくれた時に、声をかけてくれたのがきっかけでした。好奇心旺盛な私は、家族のすすめもあり、すぐに入りました。

練習は、夏は暑く、冬は寒く、きびしいですが、やるからには「早く上手になりたい」と思い、がんばっています。練習が終わると、指には水ぶくれができ、皮もむけます。やっと治ると、また練習の日がやってきます。そのくり返しですが、今ではたくさんの曲をたたけるようになりました。今は、私の友だちや弟も加わり、13 人で毎週土曜日に練習に励んでいます。夏休みには合宿にも参加しています。他の県のチームとの合同練習は、いろいろな表現の仕方、たたき方があるのだなと、勉強になることがたくさんあります。

また、あさむつ子ども太こは、発表の機会がたくさんあ

り、地域の祭りにもよく呼ばれます。老人ホームへ行く時もあります。太こをたたくだけでなく、さらまわしなどの曲芸も取り入れているので、見ている人たちが笑顔になってくれるのがとてもうれしいです。

私は、太こチームに入って、良かったなあと思うことがたくさんあります。いろいろな場所へ行って、「よかったよ」とか「ありがとう」と声をかけてもらえるようになりました。ピアノの先生にも「リズム感がよくなった」とほめてもらいました。一番良かったことは、祖母が「ひかりはがんばってるね。地域の伝統を守ってくれてるんだよ」と言ってくれたことでした。地域の伝統を守る、最初はどういうことだろうと思いましたが、昔から続いていることを、やめてしまわずに続けることで喜んでくれる人がいる、誰かの役に立っているのかもしれないと思うようになりました。

ドンドンドドン。ドンドンドドン

これからも、たくさん練習をして、私にできることをつづけていきたいと思います。

優　秀　賞

「限界を越える」

渡辺　美愛（愛知県・中学３年）

「手話が固い！」「そんな演技じゃ通じない！」「きこえる子もきこえない子も、みんなでミュージカルをつくろう！」そんな夢いっぱい、希望いっぱいの一言にひかれて手話ミュージカルの世界に飛び込んだはいいものの、現実はそう甘くなかった。

自分に障がいを持つ従兄弟がいるため、ある程度障がいについては理解しているつもりだった。けれど、「理解すること」と「行動すること」は意味も持つ重みも違う。ろう者のメンバーとどうコミュニケーションをとればいいのか分からない。そもそも手話が分からない。つつけばいくらでも問題点は出てきた。稽古１日目でもう諦めそうになっていた。

でも、ここで私を支えてくれたのが従兄弟の存在、そして自分の「負けず嫌いさ」だった。私の従兄弟は小学５年生。わんぱくの盛りなはずなのに、いつでも柔らかな微笑みを浮かべていて、誰かと喧嘩することもない。それは、彼が大人にならざるを得ない状況に置かれた事が原因だ。障がいがある。ただ、それだけで従兄弟の友達は彼をバケモノ扱いした。「近くに寄るな」「お前、アホなんだろ。」いくつもの言葉が、彼の心を、自由を殺してしまったのだと思う。従兄弟を落ち着いていて良い子だとほめる人がいた。大人びていると言った人もいた。違う、と叫びたかった。怒鳴りたかった。人の心がどれ程もろいものなのか、傷付きやすいのか分からない人達が、障がいをひとつの個性として受け止められない人達が、従兄弟をそう変えてしまったのだ。暇さえあれば外に飛び出して生き物と触れ合っていた従兄弟が泣きはらした目で帰ってくるようになった。大好きだったご飯をあまり食べなくなった。全てを諦めているような、投げやりな表情が増えた。そうして次第に何も言わなくなって、見せるのは悲しい笑みだけになった。彼が腹の底から笑い、心の底から泣ける世界を作る第一歩が、このミュージカルにあるのではないか。そう、強く感じた。そして、私自身もここで負けたくなかった。人は誰だって「苦しみ」を、「辛さ」を、「痛み」を乗り越えて生きている。なのに、私は逃げるのか？そんなの嫌だ！自分自身の、そして大切な人のため
にも、なんとかかんとか踏ん張ってきたのである。

そうして迎えた本番当日。私たちの間には太いふとい絆が出来ていた。思いを伝える方法は１つではないということを知ることができたからだ。ジェスチャーで、表情で、文字で。その時はっと気付いた。相手のことを知らないと、人は無意識に壁を作ってしまう。その壁を壊すには、人の想い、相手のことを知りたいという思いが必要なのだということを。違いを生むのは環境ではなく、人の思い込みなのだ。

あんなに怖いと思っていた舞台監督と、講演の最終日、抱きしめあいながら泣いた。もう１人の母のようにあたたかい人だった。ろう者のメンバーとも友達になることができた。今でも LINE 学校の話や恋バナをする。従兄弟の様子も少しずつ変わってきたらしい。思い切り笑うようになった、と電話がかかってきて、わたしも一緒に泣いて喜んだ。みえちゃんのおかげ、といわれたけれどそんなことはない。従兄弟の思いが従兄弟自身を変えたのだ。

サインミュージカルは長い道のりだった。けれど人生はもっともっと長く続いていく。胸が震えるような喜びも、足の先から冷めていくような悲しみも、道の途中に転がっている。私は伝えたい。ろう者も聴者も、障がいのある人もない人も、みんな同じ人間だということを。「当たり前」を受け止められないことが、互いにとってどれほど虚しいことかを。

この経験を通して、私の夢は大きく動いた。私は手話のできる小児科医になる。そして障がいの壁を飛び越えて、

子ども達の命と心を救える人間になる。この夢は、手話ミュージカルと同様にかなえることが難しい、超えることが難しい壁かもしれない。けれど、絶対に乗り越えて見せる。私は壁の向こうに広がる景色がどれほど壮大で美しいものなのか、知っているからだ。

優　秀　賞

「今、私にできること」

瀬谷　愛梨（福島県・高校２年）

私は、小学校２年生の時に東日本大震災を体験しました。津波の被害はなかったものの放射能の影響を受けました。外で遊ぶことができない、土や植物に触れない、水道の水が飲めない、県外に出ると遠巻きに見られることが長い間続きました。そのような中でも、福島に日本だけでなく世界中からたくさんの温かい支援をいただいたことを忘れられません。その時私は、災害とは人々から奪うものが多いけれども、寄り添ってくれる人々への感謝の気持ちを得ることができると思いました。そして私も将来は、困っている人の役に立ちたいと思うようになりました。

そこで私は、小学校３年生から高校生になった今でもUNHCR への支援を続けています。最初は毎月少しずつ、家の手伝いで得たお小遣いの一部を募金していました。UNHCR から定期的に送られてくる便りを見て、わずかですが自分の支援が役立っていることを知り喜びを感じています。また、北海道で胆振東部地震が起きた時には被災した子ども達を元気づけるためにキャンプをし、私もスタッフとしてたくさんの子ども達と関わることができました。さらに私は震災当時に支援を受けた恩返しを世界に向けてしたいと考えていたので、SYD が主催する「ボランティア・アクション in フィリピン」に参加することに決めました。

フィリピンボランティアが決まってからは、少しでも子ども達のためになるようにと自分ができることを考え、子ども達へ渡す支援バックに入れる支援品を自分の学校でも募ることにしました。友だちとチラシを作り、各教室に掲示したり、文化祭で来場者に配りました。その結果、タオルや学用品など段ボール４箱分の協力を得ることができました。

私はフィリピンへ行く前に SYD の研修ノートの参加目的の欄に「将来、自分が支援活動をしようとしている環境を見るため」「その土地で自分にできることが何なのかを見つけるため」と、２つの目的を書いてフィリピンに向かいました。今回の活動で支援バックを受け取れる人数は６００人なので、もらえない子どもが多いのが現状です。だから私は、もしスラム街の中を歩けばもらえなかった子ども達から非難の目を向けられたり、悲しい顔をされるのではないかと覚悟しました。当然、支援バックをもらえる子ども達は、お祭りのように歌って、ご飯と支援バックを受け取り大喜びです。しかし、もらえなかった子ども達も私たちと目が合うと笑顔で挨拶し、ハイタッチしてくれました。そのうえ「AIRI」と私の名札を見て名前を呼んでくれ子がいて、文字を読める子どもが実はたくさんいることに驚きを感じました。そして、今は支援品を渡して役に立つことができても、将来的にはフィリピンに住む人々が互いに助け合える環境づくりを手伝っていくことが必要なのだと気づき、今まで自分が考えてきた支援活動のその次に取り組むべきことが見つかりました。今回、私が経験したことは人生の財産になると思います。そしてもう一つ、私にできることは「ここで学んだことを決して忘れない」ことです。それが今の私にできる一番大切なことだと思います。苦しくても毎日笑って生きている彼らを思い続けられるのは、その姿を間近で見た私たちだからこそと強く確信しました。

ボランティアの魅力は、世界中の人々が絆によって一つに結ばれることです。これからも私は、震災時に世界中から受け取った絆のバトンを持った多くの人々に受け取ってもらえるようにこれからも活動していきます。

きらめき賞

「思いやりの気持ち」

福地　美咲（茨城県・小学４年）

私はＳＹＤスキーキャンプで４つの大切なことを学びました。

１つ目は自分のことだけでなく、みんなのことも考えることです。初日のごはんの時、私は他にやりたいことがあって集合時間に遅れてしまいました。でも、キャンプのみんなはずっとご飯を待ってくれていました。自分

のことは食後でもできたのに、私は自分のことばかり考え、待たせてしまったことを後悔しました。それからは集合時間の５分前には集合して、お皿を並べる手伝いをして、みんなのことを考えることにしました。

２つ目は笑顔で相手に接することです。２日目には雪で学校を作りました。でも班の中でさぼっている子がいて、班が嫌な雰囲気になってしまい、私もその子が来ると笑顔でなくなっていました。それでも班のモットーを「優しく笑顔」と決めたことを思い出し、その子にも笑顔で接することにしました。そうしたら、その子も本音で話してくれて、私もその子に嫌な思いをさせていたことを知りました。笑顔は、相手の心と自分の心を近づけてくれるんだなと思いました。キャンプ中やさしく笑顔でいることを心がけたら、色々な人と仲良くなることができました。

３つ目は相手の気持ちになって考えてみることです。以前知り合った子が同じ班にいたので、私は最初その子とずっと遊んでいました。しばらくして同じ班の子がぽつんといることに気が付きました。その子は友だちを作りたいと思っているかもしれないと思い、声をかけてみたら、仲良くなることができました。そうやって１人でいる子に声をかけていったら、１人でいる子がいなくなり、友達の輪がどんどん大きくなっていきました。

４つ目は「ありがとう」の言葉を声に出して相手に伝えることです。3日目にスキー場で私はリフトの上からストックを落としてしまいました。リーダの人がすぐに自分のストックを貸してくれて、私のストックを探してくれました。翌日もリーダーはいろんな場所を探してついに見つけてくれました。私のために探してくれたことが本当にうれしくて､心を込めてありがとうを伝えたら、リーダーは喜んでくれて、私ももっとうれしくなりました。ありがとうは相手をうれしくできる魔法の言葉だと思いました。

このキャンプに参加して、じぶんのとったちょっとした行動や言葉が相手の心を軽くしたり、嬉しくできるのだと気づきました。これからも普段の生活で活かしていきたいと思っています。

きらめき賞

「悔しさがくれた喜び」

荻巣　はるか（埼玉県・小学６年）

「あっいけない。」間違えて弾いてしまった。初めて出場したピアノのコンクール。何とか成功で終えたかったが、その夢は叶わなかった。

私は今年、ピアノの最大のミッションであるコンクールに出場した。同じ教室の出場生は、金、銀、銅と次々に賞を獲得した。果たして自分は入賞できるだろうか。プレッシャーの中、本番の舞台に立った。緊張したが、弾き始めは順調だった。しかし、最後の４小節で指が転んでしまったのだ。結果は落選、残念でたまらず、心がしぼんでいくように感じた。

そんな私にもう一度チャンスをくれたのは他ならぬ家族だった。「もう一度やってみたら」こんな悔しい気持ちでコンクールを終えたくない！と思い、再度チャレンジすることに決めた。１週間後のコンクールに向けて、来る日も来る日も練習した。そして本番、家族や先生の応援の中、いよいよ私の出番が来た。今回は緊張せず自信が湧いているのを感じた。半分ほど弾き終わると、ますます楽しくなり、ノーミスで演奏できたのだ。前回の悔しさから、たくさんの努力を重ね、練習をがんばってきたので、あとは自分を信じ結果を待つだけだった。

そしてついに結果発表。まずは準優秀賞から名前が呼ばれたが、その中に私の名前はなかった。けれど、不安よりも次の賞の中に自分の名前が入っているかもしれない､期待のほうが大きかった。次に優秀賞が発表された。「４６番」と私の名前が呼ばれた。うれしさのあまり飛び跳ねて喜んだ。

コンクールの最後には、全員の点数用紙が配られ、私の点数は２６０点だった。あと１点でさらに上の銅賞をとれたことを知った。ピアノの先生にそのことを伝えると、先生は「その１点は２つの意味でこれからのあなたのお守りになるよ」と言ってくださった。その２つの意味とは、このようなものだと思う。１つ目はあと１点というところまで点数を上げてこられたこと。そして２つ目は、あと１点だったという悔しさを経験したこと。

このコンクールを通して、私は諦めないでチャレンジすることの大切さを改めて知った。「ピンチはチャンス、チャンスはチャレンジ」父がよく言う言葉だ。私は今までこの言葉の意味がよくわからなかったが、そういうことか！と知る機会になった。これからは、あらゆることにチャレンジしてみようと思う。その結果が、もしも良いもので無かったとしても、全力でやり抜けば、それは次へのチャンスにもつながる。そして頑張った分の大きな達成感を得ていきたい。

きらめき賞
「突然の非日常と優しさ」
中谷　愛海（東京都・中学３年）

今年の夏休み、突然母が手術をすることになった。父は単身赴任のため家には私と高校生の兄だけだ。勿論、私も兄ももう幼い子供ではないのだから、きっと大丈夫だろうと私は勝手に思い込んでいた。だが、母は自分の体のことより私達のことを心配していたのだ。母に「２人でも本当に大丈夫か」、「祖母を呼ぼうか」などと言われ、私達は普段自分では何もできないと思われていたのだと知った。母を安心させたい気持ちと見返したい気持ちもあり、「２人でも大丈夫だ」と言い、母は入院していった。

合計で５日間という短めの入院期間だったこともあり、その間の家のことくらい余裕だと高を括っていた。だが、実際は違った。浴室の掃除や食器洗い、ごみ捨てや食事の準備など、しなければならないことは想像よりも遥かに沢山あった。私は普段、手伝いをしているとは言っても、出来上がった食事を食卓に運ぶくらいだった。しかも兄は手伝いなどしていなかった。３日目には完全に疲れきって１日中何もしなかった。だが、１日家事をしなかっただけで洗わなければいけない食器や洗濯物が山ほど溜まっていたのだ。その時、強がって２人でも大丈夫だと言ったことを後悔した。少しくらいは手伝ってくれるだろうと思っていた兄が、想像よりも手伝ってくれていなかったのだ。食器は洗ってくれない、浴室の掃除もあまりしてくれない。私は少し腹が立ったが、元から兄はあまり家のことをしてくれないことを知っていたので特に何も言わなかった。

私は洗濯をするのが１番嫌だった。洗った衣服は水が染み込んでいて重いし、１枚ずつハンガーにかけて干したり畳んだりすることが面倒だと思っていたからだ。多分、洗濯だけは進んでやらなかったのを兄が見ていたのだろう。寝る直前に突然兄が洗濯機を回す音が聞こえた。私は、どうせ自分の洗濯物だけ洗うのだろうと思っていたのでそのまま眠りについた。だが、朝起きて１番に目に入ったのは綺麗に畳まれた自分の衣服だったのだ。私は驚いて兄の部屋を見に行った。兄はいなかったが、下から音がしたので行ってみると、兄は勉強をしていた。兄は人に言われないとなかなか行動を起こさないタイプだったが、嫌いな勉強を進んでやっているのを見ると、きっと母が辛い手術を終えて帰って来るのに、自分のことを気にかけさせるのは申し訳ないと思ったからだろう。口数の少ない兄だが、実はとても優しくて人のことを気にかけられる素晴らしい兄なのだと知ることができた。

母の手術は無事終わり、予定していた退院日に家に帰ってきた。私は、母がこれまでどれほど大変な思いをして私達に楽をさせてくれていたのかを身をもって知り、この５日間で自分が思っていた当たり前は当たり前ではないのだということを学んだ。兄の優しさや気遣いに気付くこともでき、今回の経験は私にとって物事の見方を変えてくれたたいへん良い経験になった。

これからは今までの感謝も込めて、もっと母に楽をさせるために積極的に手伝いをし、この優しい兄も大事にしていこうと思う。

きらめき賞
「なりたい自分」
稲葉　紫真（兵庫県・中学３年）

この話は、私が中学校に入ってすぐの頃の話です。

私は「よし、中学生生活がんばっていこう！」という晴れた気持ちで中学校生活をスタートさせました。ですが、授業が始まると全くと言っていいほどついていけず、早くも落ち込んだ私がいました。特に、ついていけなかった教科がありました。それは数学です。何回説明されても何回問題を解いても、頭の上にハテナが多くなるばかりでした。そして、中学校生活が数か月を過ぎ、初めての中間テストがやって来ました。数学はこれまで以上に問題を解いたり、分からないところがあると、友だちや先生に聞いたり努力をしました。「大丈夫やで。次は行けるって！」と勇気づけてくれた友だちもいましたが、もう私は完全に「どうしよう」という焦りしかありませんでした。

中間テスト後からは、数学の授業で言われたことをすべてノートにまとめて書くなど、色々なことをしました。そして早くも期末テストが来ました。ですがまたしても欠点でした。夏休みの宿題もわからない問題がほとんど

で、やる気を失いました。そうこうしている間に私は、数学の授業が恐ろしくなりました。数学の授業の時は終始ノートを書く手が震えていて、数学の先生を見ると緊張して目を見て話すことができず、恐くて涙目になるほどでした。当時内気だった私はこのことを誰にも話せず自殺しようとまで思っていた時期がありました。

その思いを止めたのは、ある友達でした。その友達は、いつも明るく元気で学校が大好きな子です。好き嫌いがあまりなく、どんな子とでも、どんな先生とでも楽しそうにしゃべり、その子としゃべると相手もすぐに笑顔になっていました。私はその姿を見て「私もあんな風になりたい！」と強く思うようになりました。あの子の近くにいたら何か分かるかも知れない、自分も変われるかもしれないと思い、その友達と一緒に過ごすようになりました。そうすると、気づいたことが３つありました。１つ目が相手の目を見てしゃべっているということです。２つ目がいつも笑っているということです。私が、「これはいやだな」と思う時でもずっと笑っていました。３つ目は、人の気持ちを感じてくれるということです。私が落ち込んでいると、「どうしたん？大丈夫？」と悩みを聞いてくれたりしました。

そして月日が経ち、私も少しずつ色んな先生と話すことができるようになりました。数学の先生とも話す機会があり、勇気をふりしぼって話してみると、普通に優しく返事をしてくれました。私は安心して話すことができました。クラスメイトも「なんか雰囲気変わった？」「最近明るいね」と言ってくれるようになりました。このことを思い出すと今でもうれしいです。

そして今は、友だちもたくさん増え、先生方とも普通に楽しく話すことができます。その友達とは今でもずっと一緒にいます。もしあのまま悩み続けていたらどうなっていたでしょうか。本当に感謝しかありません。ありがとう。そして次は私が誰かに影響を与えられるように生きていきたいです。

きらめき賞

「はじめの一歩」

長壁　楓華（群馬県・高校２年）

私のボランティア・アクション in フィリピンでの経験は素敵な思い出にはなりませんでした。

初めて訪れた途上国、フィリピン。私は、移動中のバスから見た景色を今でも忘れることができません。私が宿泊したホテルのある場所には、高いビルや有名ブランドのお店がたくさん並んでいました。しかし、そこからほんの数分車を走らせると、街の雰囲気はガラッと変わり、ダンボールでできた家やゴミに囲まれた建物など、とても清潔とは言い難い景色が目の前に広がっていました。フィリピンは貧富の差が激しいとは聞いていましたが、その落差は私が想像していたものよりもはるかに大きく、とても衝撃を受けました。

特に、スモーキーマウンテンやパヤタスといった地域は、吐き気が伴うほどの強い悪臭を経験しました。しかし、その悪臭以上に私が衝撃を受けたものは、小さな子どもたちが学校にも行かず淡々とゴミを拾っている姿でした。私は彼らの悲しい背中を見た時胸が締め付けられるような気持になりました。そして同時に、強い怒りも感じました。それは私が彼らに何もしてあげられないという悔しさと、この状況を作ってしまっている世間に対しての憤りなど、様々な感情が入り混じったものでした。

その一方で、フィリピンの方々はたくさんの幸せと勇気を与えてくれました。その源は「たくさんの笑顔」でした。私はフィリピンを訪れるまで、貧困地域に住む人々は暗くて、笑顔を見せることもあまりないだろうと思っていました。しかし、それは間違いでした。彼らはどんなに最悪な環境でも、言葉が通じなくても私たちをいつも笑顔で歓迎してくれました。特に、マザーテレサの死を待つ人の家という施設にいた男の子との出会いは、私にとってとても印象的でした。彼は小学生になるかならないかの年齢だったと思いますが、英語で話しても、タガログ語で話しても「きょとん」としていて会話をすることができませんでした。しかし、私が彼を抱きしめると、彼は嬉しそうに笑いながら、私のことをギュッと抱きしめてくれました。私はこの時、言葉では言い表せないほどの大きな幸せを感じました。そして、言葉は通じなくても、心を通じ合わせることはできるのだと感じました。私は彼の名前も年齢も知らないけれど、いつか必ず笑顔で再開したいと思っています。そして、その時には、日本とフィリピンの架け橋になれるような、そんな友人関係を気付いていきたいと思っています。

はじめに、私は今回のボランティアの経験は素敵なものではなかったと言いました。それは退屈であったとか、無駄だったとかそういうことを言いたいわけではありません。ただ、この経験を１つの素敵な思い出にしてはいけないと思ったのです。私たちは貧困問題という難しい

テーマを見ると自分には関係ないと思い、目を背けがちになってしまいます。しかし、私はこのボランティア経験を通して、ただの高校生である自分にも出来ることがあるという自信やこの問題に対してまっすぐに向き合っていく覚悟を決めることができました。今後は笑顔あふれる活動をしていくことで、経済的貧困だけでなく心の貧困問題を解決していこうと思っています。

きらめき賞

「今の自分にできること」

東江　椋佑（沖縄県・大学２年）

「私は、将来どのような仕事をするのか、１人の人間としてどのような生き方をしていくのか。たくさんの迷いがある中で大学生活を過ごしていました。そんなとき、SYD からボランティアフォーラムの案内があり、そのプログラムに新宿のゴミ拾いをきっかけに生き方が変わっていった荒川祐二さんの講話があるということで、何か自分の参考になるかなと思い軽い気持ちで参加することにしました。

荒川さんは最初から最後まで冗談なども交えながら面白く話してくださり、その話術に引き込まれ周りは私を含め全員が笑いの渦でした。しかし、話の中盤から私は笑わなくなっていました。話が面白くなくなったというわけでは決してなく、むしろますます面白くなっていたのに笑顔になれませんでした。

「普通でいい普通でいいっていうけど、じゃあ一体お前の普通ってなんやねん。」「お前はやりたいことを口に出してそれでやった気になっているだけやろ。」「ネガティブな言葉は使わない。そういうことばかり言う人の周りにはそういう人しか集まらへんから。」

荒川さんは過去にお兄さんに言われた自分自身の話を話していたのに、その言葉の１つ１つが私は今の自分、そして今までの自分に向けて言われているように思ったのです。言葉が鋭く自分の心に深く刺さっていました。私は、安定した職について普通の暮らしができればいい。めんどくさいという言葉が口癖。何かをやると決めてもだいたい三日坊主。荒川さんは昔の自分をクズだとおっしゃっていました。そんな過去の荒川さんと今の自分が重なったわけです。荒川さんに「あなたはクズだ。」と面と向かって言われているように感じ、笑顔なんて出るはずがなかったのです。正直、自分はダメな人間だと薄々感じていました。本当にやりたいことから逃げ、楽な方の道を選び続け、嫌なことがあればすぐに不平不満を言う。そんな自分が好きになれず、それじゃだめだと分かっていながら向き合うこともせず、最終的には「なんくるないさー」と逃げ続けて来ました。「なんくるないさー」とは沖縄の方言で「何とかなるさ」という意味です。しかし本当は「やるべきことや今の自分にできることは全てやったんだから何とかなるさ」という意味があります。そんなことは知らず、高い壁から逃げ続け、やらない理由は「めんどくさいから」。そんなことを２０年も積み重ねてきたと思うとゾッとしました。しかし、荒川さんが変わるきっかけを得たのは今の私と同じ２０歳の時でした。今変わらなければ。ちゃんと自分の人生を生きたい。昨年のフィリピンのボランティアをきっかけに芽生えていたこの思いが荒川さんの講話をきっかけに一層強くなりました。

自分を変えるために必要なのは今まで私がめんどくさがって逃げ続けてきた「今の自分にできること」に真剣に向き合うことでした。２０歳の時の荒川さんにとってそれが新宿のゴミ拾いでした。荒川さんの講話の後「今の自分にできること」を考えた時に、フィリピンの子ども達が日本からもらったランドセルをとても大切に使っているのを思い出しました。ゴミ山の家で１泊ホームステイを経験しましたが、ホームステイ先のレニュエルは１５歳の高校生でした。彼は日本の小学生が６年間使ったランドセルを譲り受け、とても大切に扱い、そのランドセルに名前まで付け、雨の日には濡らすのが嫌で学校に持っていかないというくらい大切にしていました。自分の生き方を考えるきっかけにもなったフィリピンでの活動、ゴミ山の近くに住む子ども達に少しでも恩返しがしたと思い、ゴミ山の子ども達にランドセルを送る活動を始めました。自分のランドセルはもちろん、大学の友人や部活動の仲間、SYD の活動で知り合った友人たちにも声をかけ、１０個以上集まってきました。これらを現地に届けるための送料を工面するためにアルバイトをがんばっています。これは私にとって１歩を踏み出す活動でもあるため、本当の意味で変われるかどうかはこれからの自分次第だと思っています。

大切なのは「今の自分にできること」を積み重ねていくこと。そして、それを積み重ねた先に、自信をもって「今の自分結構好きだな」と言えている自分に出会いたいと強く願っています。

きらめき賞

「一歩先へ」

三浦　彩由香（東京都・大学３年）

自分なんて大した人間じゃない。自分は他の人と比べて、胸を張って言えることが何もない。そう感じたことのある人はいませんか。

自分に自信が持てない。私もその一人でした。三年前、憧れの大学に入学してから、私はとてつもない激しい劣等感を抱くことになりました。自分のまわりの学生を見ると、ずば抜けて頭の良い人や語学の才能がある人、学生であるのにも関わらず会社を立ち上げている人など、挙げだしたらキリがありませんが、兎に角自分には到底かなわないであろう人たちがぞろぞろいることに気づいたのです。そうした人たちを見て、いつしか「私はダメな人間なんだ」という思いにとりつかれていました。人に比べて、私は自信を持って言えることがない。低い自己評価へとつながり、自己否定の日々が続きました。

そんな悶々とした日々を過ごしながら、三年生になった時、ふと大学内での障害者学習支援ボランティアを募集しているメールが目にとまりました。大学には、視覚や聴覚に障害を持つ学生もおり、大学側は少しでも学びやすい環境をつくるために、様々なサポートを行なっています。支援ボランティアもその一環で、授業のサポートをするというものです。メールには、聴覚障害者のために授業中、先生の話す内容をパソコンに文字で起こすというパソコン通訳を募集していました。

それまでの私であれば、ただメールに既読をつけて終わってしまったでしょうが、この時ばかりはやってみようかなという気持ちが出てきました。無意識のうちに、今までの自分を変えたいという思いがあったのかもしれません。一方で、タイピングのスピードに不安があった私は、応募することに抵抗を感じていました。そんな中、身体障害を患う祖母から「障害者の方々は小さなサポートでもあったら嬉しいと感じている。やってみたらどうか。」と背中を押され、応募してみることにしました。

そして、支援ボランティアとして活動することが決定しました。しかし、本来であれば二人体制でパソコン通訳を行うところ、人手不足ということで一人で任されることになりました。パソコン通訳は、スピードが命です。先生がおっしゃったことをいかにはやく文字に起こせるかが問われます。一人で無事にサポートをすることができるのだろうか。初回の授業は不安を感じずにはいられませんでした。いざ、授業が始まってみると、想像以上に先生の話すスピードははやく、必死にパソコンに文字を打たなくてはならず、授業が終わると今までにない疲労感に、しばらくぼーっとしてしまいました。すると、隣に座っていた聴覚障害の学生から「本当にありがとうございました！！分かりやすいタイピングで助かりました！これからもよろしくお願いします。」と笑顔で言われたのです。

その瞬間、私は今までの疲れが吹き飛び、嘗て感じたことのないほどの嬉しさがこみ上げてきたのです。この「ありがとう」という言葉がどんなに嬉しかったことか。自分も、小さなことではあるかもしれないが彼女のために貢献することができているということを感じた瞬間でした。支援ボランティアをやってみてよかったと心から思いました。この感謝の言葉に、私にもできることはあるのだと自己肯定感を持つことができるようになり、前を向くことができるようになりました。

たかがこんなことでと思う人もいるかもしれません。でも、私はこの場で伝えたいのです。自分なんてたいしたことないと思っている人へ。まず、何かアクションを起こしてみましょう。思っているだけでは何も変わりません。思いきって一歩踏み出してやってみたことが、実は誰かのためになっていたり、何かの役に立ったりするという道へつながっている可能性もあるのです。自分を変えることができるのは、自分自身しかいないのです。そして、自分次第でこれからの未来はいくらでも変えることができるのです